

たほうがびつたりだったように思われた。松尾教授の講演のタテ看板をみかけて馳せ参じたほうだったが、そのなかで、四十年後も判然と記憶に残っている講話の一コマがある。ドストイェフスキーの『地下生活者の手記』の話ではなかったかと思うが、死を目前にした肺病におかされた老婆が「もうすぐ楽になれる」という周囲の人のなぐさめに対して、「私はどんなに苦しくとも、この世にいたいのだ」というくどりを最高の熱情をこめて話したことである。そのときの口調は今でも真似ができるほど鮮明に私の脳裏に残っているのはどうしてであろうか。そのときの結論の部分も緒論の部分も覚えていないのに、そこだけが残っている。若しかしたら、教授は結論らしきことには触れなかったのかもしれない。それが、先生のアジテーターとしての側面を強烈に印象づけたのかもしれない。

こんなつまらないことを書きながら想起されたことに、「アジというのは事実を羅列することである。結論を話すのはプロパガンダだ」という定義を松尾先生から聞いたように思う。多分、先生はこんなこともよく話されたように思うが私の記憶違いであろうか。

私たちが在籍した二十四年から二十八年にかけて、日本の学生運動は高揚期から沈滞期へさしかかっていたが、当時、早稲田の活動家たちは先生から、はかり知れない教訓とエネルギーを付与されてきた。そして、その範囲は文学部の学生ばかりではなく、全学部に及んでいた。この記念行事の発起人の顔ぶれをみると、先生の広範な影響力を思いしらされるばかりである。

(昭28・一法卒)

唯物論哲学とドストエフスキーとの間での深い分裂

——それを統一していた先生の二つの契機は……

長 瀬 隆

一九五二年に私は早大露文で学生生活を始めた。文化団体には卒業までソ研に属した。

松尾先生は一文では教養課程の第二語学のロシア語を担当していて、他にいかなる講座をも持っていないかった。ロシア語を第一語学とする露文の学生にとっては出席の必要のない授業であった。しかし単位の履修とは無関係に、その話を聞くために出席する学生はいて、私はそのひとりであった。

語学の授業としては手抜きなどというようなものではなかった。そもそも教える意志はなかったのである。ロシア語をちゃんと教える人はほかにいるのであるから、勉強したい者はそれに出席すればよいのであると考えており、実際そのように語っていた。自分としては他の人たちがしないことするのであると考えていて、その日まかせに様々な話をしていたのである。それは、あるときには『資本論』についてであり、唯物論についてであり、宮本百合子についてであり、ドストエフスキーについてであり、最近の国会選挙の結果についての論評であったりした。そして私はほとんど先生が五十年以来分裂している日共で国際派に属する人であることを知るようになった。

露文は主流派が強く、ソ研はその細胞が拠点とした文化団体のひとつであったろう。樺太で生れ育ちソ連占領下で一年半暮して引揚げた私は、スターリンのソ連には疑問を抱いていた。しかし周囲の雰囲気には押されるようにして五十三年晩秋に日共（主流）に入った。翌五十四年秋に悪名高い総点検運動があり、私は細胞に嫌気がさし活動を離れた。そして五十五年夏に六全協があったわけである。同年秋までに早大細胞のリーダーであった者——露文が多かった——の全員が退き、代って新指導部が選出された。私はそのひとりとなった。

細胞内で「教育」担当ということになったが、党員の大半が五十年の党分裂を体験としては知らなかったためにそれを松尾先生に教えてもらう必要がある、お宅に伺うようになった。こうして細胞総会に先生が出られて話すということになったのである。

以来しばしばお宅に行っていた。私自身卒業が近づいていた。先生は一九五七年四月から大学院でドストエフスキーについて講座を持つことになっていて、私は先生のもとで大学院生活をするつもりだった。ところがそれが、五十六年十二月の先生の急逝によって実現しなかったのである。先生がそんなに若くして亡くなるようなことがなかったならばという思いとともに、もしも先生がもっと生きていたならば自分はどうなっていたらうという思いを私はなしとしない。

事实は数年ぶらぶら暮し——この間に二度ソ連に行き——その後貿易商社に勤務し日ソ・日中貿易に従事して今日に至っている。二年前に樺太を主題とする一冊の本が世に出たのみの凡夫である。

唯物論哲学者としてのおよびドストエフスキー学者としての先生についてどなたか書かれるであろうが、恐らく執筆者は難渋するのではなからうかと思う。それというのも書き残されたものがあまりにも少なく、今となつては手がかりがつかめないといったところがあるためである。

そうとは知らずに晩年にあつた先生の語るところを聞いた者として言えば、先生は唯物論哲学者としてはあまりにもドストエフスキーに傾倒していたし——言うまでもなくドストエフスキーは唯物論者ではない——、といってドストエフスキーに傾倒する文章や著作をするためにはあまりにも唯物論者であつた。つまりは矛盾し分裂していたのであり、そのことが座談で多くを語る人であつたにもかかわらず、著述をきわめて困難にさせていたのである。

それはまたこういうこともある。政治的には日共党員であり、マルクス主義を標榜する人ではあつたが、文学については別様に考えていた。社会主義文学の祖といえは『母』のゴリキーということになるのであるが、先生はほとんど認めていなかったし、「文学においては共産党はだめだ」と言っていた。それは文学を志す者は共産党に入つてはならないといわんばかりの口調でさえあつた。真の文学というものは『カラマゾフの兄弟』のように人間の存在の根源を問うものであると確信していた。すでに日共批判を始めていた吉本隆明の「マチュ書試論」（一九五六）などを賞讃していたことなどが思い出される。

唯物論哲学とドストエフスキーの間で深く分裂していたと思われる先生において統一の契機を支え